

個性輝くまちづくり

市民ボランティアが クラブ活動を指導

長崎市 戸町小学校





五月二〇日の長崎の天気予報「曇りのち雨、ところにより雷雨」は、見事に(?)はずれた。長崎市立戸町小学校(飯笹芳子校長)の市民ボランティアによるクラブ活動が、心地よい青空の下、始まった。五年三組の教室からは、「ここを折れば、はい亀の出来上がり」と聞こえてくる。折り紙クラブの山口さんご夫婦の声だ。「自分の折ったのがちゃんと亀に見える人、手を挙げてエ」「はい」。山口さんご夫婦が一人ひとり丁寧に教えている。

今年度は、将棋・英会話・木工・茶道・野球など一九クラブを実施している。四年生から六年生までの子どもたちとボランティアの大人たちがともに楽しんでいる。

於保孝一教頭先生は市民ボランティア導入について、「これまでのクラブは教師の得意な分野にあわせてプログラムを組んでいた。ここに市民ボランティアが指導者として入ること、クラブ活動に広がりが出る。より多くの子どもの要望にも応えられる。これをきっかけに学校開放にもつながる」と話す。

学校とボランティアの仲介役が育英会(PTA)だ。保護者にチラシを配り、自治会を通じて校区内の全世帯に回覧してもらい、ボランティアを募ったのが平成九年。同年一〇月から市民ボランティアの指導によるクラブ活動がスタートした。



現在クラブは、第一、三土曜日の午前一時から一時半まで。三、四時間目の授業があてられている。ボランティアも三年も経つと勝手知ったるもので、育英会教室での打ち合わせもそこそこに切り上げ、すぐに担当クラブの準備に取りかかる。チャイムが鳴ればクラブのはじまりだ。

調理室ではお好み焼き、ホットケーキ、オムライスなどをつくっている。包丁使いはおぼつかないかと思いきや、侮るなかれ、だ。将棋クラブでは腕組みをしながら盤面をにらみ合う。担当の江崎進さんは日本将棋連盟長崎支部の支部長さん。英会話をやっている図書室では、米倉裕子さんの「How do you do?」に続いて子どもたちが大きな声で「Super!」と親指を突き上げる。郷土芸能クラブからは太鼓や笛の力強い音色がとどろいた。子どもたちは一様に元氣ハツラツ。「授業中には見せないような顔」と於保教頭先生。

一方校庭では、カメラクラブが自作のピンホールカメラを覗いている。かくしゃくと四面コートバレーを指導しているのは、最高齢七六歳の村岡安高さん。野球の野中日出男さんは元中学校の野球部監督だ。

クラブ活動は校内だけではない。ふれあいセンターは卓球クラブ、山下トキ子さんのお宅は茶道クラブの会場だ。



山下さんは、三年前このボランテアに真っ先に手を挙げた一人。「ただお茶を教えるだけでは地域住民によるボランテアの意味がないんです。道で会ったときに「おばちゃん、こんにちは」と声をかけられるような関係をつくりたい」と山下さんは言う。子どもたちの背筋もピンと伸びている。それもそのはず、茶釜、茶碗など茶器は全部本物。学校では揃えられなくても、地域の人の手助けがあればこそ、本物を使った茶道を体験させられる。山下さんは、「卒業した子どもたちでも「もっとやりたい」という子がいればぜひ続けたいですね」と言った。山下さんの目を盗んで子どもたちにもちょっと意地の悪い質問をしてみた。「先生怖くない?」、すると首藤千晶ちゃん(六年生)は「やさしい先生です」。その顔はここでお茶を習うことが本当に楽しいという感じを象徴するいい笑顔だった。

市民ボランテアの人たちは、職業も年齢も性別もまちまち。共通点は「戸町の住民」ということ。そんな地域住民が、先生になることで、学校開放にもつながり、さらに地域住民と子どもたちの結びつきが強くなり、地域の教育力が高まっていくに違いない。

前日までの天気予報を覆したのは、戸町の子どもたちの元気さとボランテアの子どもたちを愛する気持ちだったのかも知れない。